和洋九段女子高の生徒５人

商・田畠ゼミに参加「大学の授業」体験

高大連携

本学の高大連携協定校である和洋九段女子高校の1年生5人が、11月から12月にかけて3回、商学部・田畠真弓ゼミの授業に参加した。同校とは2022年に協定を締結しており、ゼミでの交流は初めて。

12月15日には、田畠ゼミ生と高校生5人が新宿区の新大久保駅周辺でフィールドワークを行った。当日は11月24日に行った事前学習を踏まえて、外国籍の人が多く暮らす新大久保の街を「多文化共生」の視点で観察しながら歩いた後、地元の商店街振興組合理事長から話を聞き、街の現状や課題について理解を深めた。

12月22日に行われた事後学習では、はじめに田畠ゼミ生がスライドを用いて、フィールドワークで得た知見を報告。新大久保の街のにぎわいの理由として、「常に新しいものを生み出し続けている」「日本人だけではなくインバウンドをターゲットにしている」点などを挙げた。

一方で課題も多く、「政治状況の影響を受けやすい」「ファミリー層には住みにくい」などの問題点を指摘した。

現状と課題を踏まえて解決策を考えるグループディスカッションでは活発に意見が交わされた。高校生のグループは「課題を多くの人に知ってもらうための情報発信が大事だ」と発表した。

田畠教授は授業を振り返り、「世代を超えた交流や学びは重要で、新たな人や文化との関わりからイノベーションは生まれる」と総括した。

授業に参加した高校生からは、「先生と学生が対等な関係でディスカッションする大学の授業は新鮮であり、とても面白かった」「多文化共生について興味がわいた」などの感想が寄せられた。

ゼミ生のサポートでグループディスカッションに挑戦

フィールドワークでは商店街の方から話を聞いた

高大連携聴講生修了式

高校生が大学の講義を聴講する2022年度高大連携聴講生の修了式が1月21日、専修大学サテライトキャンパスで行われた。高大連携協定校の4校（神奈川県川崎高校、神奈川県座間総合高校、神奈川県元石川高校、東京都大田桜台高校）、専大附属高校、専大松戸高校の2、3年生31人に修了証書が授与された。

修了式に参加した高校生たち

高校生たちは、「国際経済論」「簿記論」「日本文学講義」など、各自の興味・関心に応じた科目を大学生とともに受講した。

式には、高大連携連絡協議会の砂原由和座長（ネットワーク情報学部教授）、鹿住倫世副座長（商学部教授）、金子洋之副学長らが出席。聴講生との懇談では「大学で学びたい分野がはっきりした」「90分間の授業に慣れることができた」「授業はレベルが高くて難しかったが、この経験を今後に生かしたい」などの感想があった。

相撲部

多摩桜の丘学園で相撲教室
生徒たちと交流深める

手本を見せながら四股の踏み方を指導する部員

体育会相撲部の部員たちが12月21日、都立多摩桜の丘学園（東京都多摩市）を訪問し、知的障害教育部門中学部の約70人を対象とした相撲教室を行った。

参加したのは、蒲田勝太コーチ、部員の中野智基さん（経済3）、志戸俊輔さん（商3）、林田泰嘉さん（経営2）の4人。

相撲部と同学園はコロナ禍前から交流を続けており、今回は同学園での等身大の紙相撲大会を前に大学生力士の力強さを体験してもらいながら本格的に相撲を習ってほしいと実施された。

蒲田コーチらは、四股（しこ）の踏み方をはじめ、土俵での作法を手本を示しながら指導した。

また、同学園教諭との模範取組のほか、生徒たちが作った大きな紙相撲を一緒に楽しむなど、相撲教室は終始和やかな雰囲気だった。

生徒からは「本物の技を目にすることができた」「一緒に稽古できて楽しかった」などの感想が寄せられた。

中野さんは「みんな元気が良く、楽しんでくれて良かった。この2年間はこういった学外での活動ができなかったので、交流できてうれしい。今後もぜひ参加したい」と話した。

部員と同学園の教諭による模範取組

懸賞論文・文芸作品コンクール

文芸部門鳳賞に安田さん
柘植光彦文学賞は杉山さん

学生部が主催する懸賞論文・文芸作品コンクールの表彰式が12月20日、生田キャンパスで開かれた。文芸作品部門の最高位である鳳賞に安田真裕さん（文4）が、同部門柘植光彦文学賞に杉山ももさん（法3）が選ばれた。懸賞論文部門は鳳賞の該当者はなかった。

鳳賞を受賞した安田さん（左）に学生部長職務代行の佐竹弘靖教授から賞状が手渡された

安田さんの『風は夕陽を連れてくる』は、風力発電の風車を重要なモチーフにして、幼なじみの男女の別離と再会を描いた作品で、「ままならない事象をどう受容していくか」というテーマを表現した。文学部日本文学文化学科の小林恭二ゼミで文芸創作を学び、来春から大学院に進む安田さんは「あと2回応募のチャンスがあるので、3年連続での鳳賞受賞を目指したい」と目標を語った。

柘植賞の杉山さんの作品は『性と亀裂』。高校を舞台に、主人公の女子生徒とトランスジェンダーの同級生が仲を深め、やがて二人の関係に亀裂が生じるさまを丹念に描いた。杉山さんは「その時々で関心があることをテーマに据え、これからも書き続けたい」と話す。

本年度は論文部門に7作品、文芸部門に27作品の応募があり、両部門で12作品が入選した。

論文部門審査委員長の上村妙子文学部教授は、入選作について「さまざまな文献に基づいた主張の展開や広い視点からの指摘・考察など、論文の書き方の見本となるような作品だった」と評した。

文芸部門審査委員長の小林教授は「今年度の応募作は質量ともに充実していたが、なかでも鳳賞と柘植賞を受賞した2作品は人間描写に優れた上質な小説だった」と講評を述べた。

入選作の作品集は3月に刊行を予定している。

懸賞論文部門

鳳賞	該当なし
優秀賞	小松　来夢（文1）
	山原　大翔（経済2）
佳作	西口　賢信（法4）

文芸作品部門

鳳賞	安田　真裕（文4）
柘植光彦文学賞	杉山　もも（法3）
優秀賞	水野　遥香（文4）
	笹森　貴哉（文4）
佳作	久保田　尚行（文4）
	吉田　結香（文2）
	冨岡　大雅（法2）
	大島　帆乃佳（国コミュ1）
	北　将吾（文4）

アカデミーモールコンサート

ジャズの名曲　GSOが演奏

昼休みのひと時を彩る音楽系サークルによるミニコンサートが12月22日、生田キャンパスで開催された＝写真。今回は「アカデミーモールコンサート」として10号館1階アカデミーモールを会場に、スウィングジャズ研究会（グリーンサウンズオーケストラ＝GSO）が出演した。

GSOは『September』などなじみのある5曲を披露。多くの学生らが足を止め、盛大な拍手を送った。代表の菊田未来さん（文2）は、「予想以上に多くの学生が聴いてくれ、演奏していて楽しかった」と振り返った。